

第4回 交野市総合教育会議

日 時 平成27年10月2日（金）13：00～

場 所 交野市役所 本庁3階 第2委員会室

出席者 市長、羽石教育委員長、山本教育長、中井職務代理人、神谷教育委員、森脇教育委員、良部長、船戸教育次長、盛田部長、北田部長、坪井部長、苗村次長、南課長、福田課長、吉田、後藤課長代理

傍 聴 なし

市長 挨拶

事務局 交野市教育大綱案の説明

市長 説明はお聞きの次第であります。それでは、皆様方のご意見を頂戴してまいりたいと思います。よろしくお願いたします。実際、位置づけ、そして期間、また総合教育会議の担う役割、このあたりについて特になにかご意見ございますでしょうか。

中井 目標という言葉が、この大綱の中に使われていると思いますが、目標はどこで見ていったらいいのか。今回改めて設定しないのか、これ全体が目標なのか。目標という言葉が法律の中で使われていると思いますが。計画は決まっていますよね。5か年の。目標というのは改めて設定していないということではないんですか。大綱の中で、普通計画であれば、ある程度目標値を決めて、その中で進捗がありますし。それと大綱の中でも目標という言葉が使われていると思いますけど。

森脇 それは、それぞれが違う目標があるので、落ち着く先はこれから確認していかないといけないと思います。

中井 事務局、目標というのは理解されていますか。大綱の記載事項の1項の中で、結果として大綱に定めた目標を達成できなかった場合について、尊重義務違反には該当しないこと、ということ。ということで目標という言葉が使われている。いわゆるこの中身につきまして、双方に尊重義務がかかるものであること、なお会議で調整した方針に基づいて、事務執行を行ったが結果として達成できなかった場合については、尊重義務違反には該当しない。ということで目標という言葉が使われている。全体としてみたらいいのかな。

山本 それぞれが、その位置づけのところで交野市の学校教育ビジョンとか今後作っていく生涯学習ビジョンを柱としていく形の位置づけをとっていますし、それぞれのビジョンの中では五か年計画の中で毎年、毎年、PDCAサイクルの目標値。五年先の目標を設定していますし。

中井 それはいいんですけど、大綱に定めた目標を達成できなかった場合は、と書いてあるからね。こ

れはどういう意味なんだろうかと聞いているんやけど。当然、ビジョンとか総合計画とかはそれぞれ目標や期間があって、その目標でPDCAを回すということなんやけど。これはどういう風に理解したらいいのかな。特に今回、文章として書いて、いわゆる情緒的な文章で書いてあるので、なかなか大綱としての、どうやってPDCAを回すのか、お互いどこで合意・議論・改正するのか。今の文章だったら改正する余地がない。これはもし、今後とも大綱の目標はどういうことですかと聞かれたら、答られるようにしておいた方がいいのではないですか。目標というのは、我々はこう考えているという。それは委員長が言われた、教育ビジョンではないですよ。大綱に定めた目標が達成できなかった場合には、お互い、市長部局と教育委員会が大綱の尊重義務違反には該当しないことと書いてあるわけですから。

森脇 ちょっと確認したいのですが、教育の基本方針の中でそれぞれに取組が書かれています。例えば質の高い教育環境の整備であれば、「学校教育の適正規模・適正配置の方針を定めます」とありますので、定めたことを表して、いつまでにできるのかということが一つの着地点ではないかと思えます。

例えば、次の地域みんなで子どもたちを支える学校の実現というところでは、「学校を核としながら、共に学びあい、共に高めあう新たなコミュニティの形成を図ってまいります」と書いてあるので、じゃあその形成というのは具体的にどういうことで、いつまでに実現していくのかということは、書いたからには落とし込んでいかないといけないと思うので、お聞きしたい。だから、書いただけじゃなくて、実現化していくには、見える化して、そこまで期間も決めてやっていかないと。それは大綱とは別だと思えますけど、大綱は大綱でこれでいいと思えますけど、それを確認していくのがPDCAだと思うので、期間と実現していき、「図ってまいります」と書いてあるので、どういう形で図るのかということは、やっぱりどこかに明記しないと。

中井 この議論の一番最初から、私は教育成果をいかに達成するか、成果が問われると申し上げていたと思えます。交野が、かたのサイズという表現はおかしいかもしれませんが、相対的なことを含めて交野の教育を常に評価していく、これがPDCAにつながる。そのためには目標が必要。正直なところ、教育ビジョンについても、私はそれが不足していると思うので、反省しているところがある。教育理念の「百年の森」と書いてしまったので、余計にそれが問われる。理念としてはいいが、どうやって我々がどうやって交野の教育をやっていくか。企業であれば中期的な目標を設定して、それに対してどう達成していくか。周辺環境はグローバル化、環境変化に基づいて交野の教育はどう変わらなければいけないか。それはちょっと、今大綱の目標に入れるかどうかは別にして、考えていかないといけない。目標というのは我々が事業・施策をする際に常に考えていないと。公務員は行為責任は問われるけども結果責任は問われないというDNAが払拭されない気がしますね。

羽石 私も、目標というのは、細かく多岐にわたるのであって、それが学校教育ビジョンに具体的な取り組みですから。ただ、今の学校教育ビジョンがこれで完璧なものであるかということ、別の問題になるかと思う。この中では、各年度の目標、そして全体的な5年間の大きな目標というのは、もう入れているわけですから、それぞれの中でPDCAを回しながら改善し、2ページの大綱の位置づけにあるように、学校教育ビジョンと交野市の教育大綱というのは両方見ていく。ビジョンがどうなっているかを大綱に盛り、その方針がビジョンの中に入っているのかどうかを見ていく。こういう形で行くものだと私は理

解している。そういう面で見れば学校教育ビジョンは今の段階であるわけですから、これをもっともっとブラッシュアップする必要があるが、教育総合会議でする必要があるだろう。そういうことでこの大綱の中で細かく書き込んでいくと、学校ビジョンとの違いはどこになるのか、ということにもなるのでは。私は大枠としては、この書き方でよかろうと思います。

中井 目標というのは、その前を書いてあるわけで、結局私がいつも申し上げているとおり、国の第2期教育振興基本計画の第1部及び第2部で、成果目標の部分が大綱策定の時に斟酌ということですから。基本的には成果目標がどういうことか。これを具体的にどう書いていくか。それで後の話で、後で「生きる力」とか「新しい学力」とかアクティブラーニングとか言葉が出てきますが、言葉の定義をしておくことによって、成果目標との整合性が取れるのではないかと思います。その話はまた後でさせていただきます。

森脇 方向性はあるんですけど、各自治体でこのとおりやらなければならないということでもないですよ。参考ですよ。

中井 当然です。自治体ごとの個別の事情がありますから。例えば自治体ごとで、英語を非常にやりたいということであれば、それをフィーチャーする大綱となる。当然ビジョンに基づいて、目標がでてくるわけですから。

森脇 今回、素案と比べてすごく分かりやすいと思いましたし、言葉が行き届いているなと思いました。全てが網羅されていますし、それぞれイメージができるなと思ったんです。これだけのことがちゃんとできれば大したものになると思います。ただ、1つひとつのことに、きちっと「定めます」というように明言されているように思うので、明言されている部分について、どうしていくのかを明確にしておかないといけないと思います。それで1年後に、どこまで進んだのかというチェックをしていかないと、これが無になってしまうので。チェックができるような具体的な施策というものがあって、この場で市長とチェックしていくのが大切では。

山本 実際にはビジョンとかいろんな話ができていますけど、ビジョンの方で、教育委員会として5年計画で、毎年アクションプランという形で1年で行うべき細かい事業施策を書き出して、1年の終わりに総括しながら評価しながら次の年に生かしていくことをやっていますので。当然事業をやっていくためには予算の裏付けとか色々ありますので、全体としてこれでいいと思いますが、その中で、今度のアクションプランは今年もう評価に入っていますが、ABCDくらいまでランクつけながら評価しています。その中でなぜできなかったのかという議論まで、こういう場で議論していったらいいのではないかと。それで実際の中味の細かい話は、総合教育会議の中でできるし、来年度に生かしていけたらと思います。市長と意見を交わしていったらいいのでは。この中にすべて書いてしまうのは、なかなか難しいのでは。

神谷 私も同じ意見で、目標が書かれているかどうかということですが、私としては学びのセーフティネットの構築、希望と安心をもって学べる環境、これは抽象的ではありますが、1つの目標ではあると

思います。これをどう評価していくかという問題で、いわゆる行為評価と成果評価という問題があると思います。成果評価というのは、この目標だけではなかなか難しい。どういう成果が上がったのかというところを考えるのと難しくなってくる。具体的には、学校教育ビジョンの方で、それをいかに具体化していくかという問題で、生涯学習については生涯学習ビジョンの中でどういう風に作っていくかという問題になると思います。目標に関しては、抽象的ではあるけども、書かれているのではないかと理解しますし、今後はそれぞれの学校あるいは、教育ビジョンにより具体化して、成果指標という評価できるものに変えていくというのが重要なのかなと思います。

中井 結果的には、その目標といっても書いてある、生きる力、学力、学びのセーフティネット、未来につながる絆づくりと書いてあることやから、結局目標はそういうことという共通認識をもっていただければいいのかなと思います。一番最初に言った、絵に描いた餅ではないということで、これをもとにそれぞれが施策を実行するんやということで。今、神谷委員がおっしゃったように、これが目標やということで。目標であるのであれば、そこで誤解の無いように、それぞれが違う意味の使い方をしていたら目標にならないからというのが、次の話。これはいわゆる目標だということで、僕もそういう認識でいいと思います。目標として考えた場合、この大綱で齟齬がないのか、誤解を与えることがないのかという議論を次にできると思います。

森脇 教育ビジョンがすでに定まって進めている中の目標値であるとか、具体的なことはそれぞれがそのまま盛り込んでいけることですね。ただそれが照らし合わせていきながらやらないと。この件については、教育ビジョンにおいて目標値をもってやっているの、そういうことを総合的に考えると…

中井 なぜ私が目標というかというと、教育ビジョンで掲げられているけども、教育ビジョンを作った時に、ニーズに応じて変えていくものだという議論をしてきた。教育ビジョンに書いてある意味内容が、教育ビジョンがこの大綱に追いついてくるような考え方を僕は目標やという意味で目標の確認している。

森脇 じゃあそっちをチェックしてそこを変えていかなきゃいけない。

中井 そうことです。これをフィードバックする、いやいや教育ビジョンに書いてありますということでは、お互いの交野の知ということにならない。なんでかということ、今の教育的ニーズは変わってきている。今回の中教審にしても、経済界のニーズに応じて大学教育はどう変わるべきかという議論が出てきている。大学教育が変わるときには、初等・中等教育も変わらんとだめ、という文脈の中で、アクティブラーニングとかがあるのではないかと。アクティブラーニングは中教審の大学教育に対して出てきた言葉で、社会的ニーズが変わる中で、我々自身が「ビジョンに書いてありますから」ということでは、建設的ではないと思います。お互いの共通目標としては、社会的なニーズの基づいて、どんどんと積極的に変えていくような色ができればいいのかなと思います。それで成果目標は、変わったか変わらないか、対応できたかできなかったかということが、1つの成果の達成の度合いかなと思います。個別事業じゃなくて。今後のこの会議の議論の中でと思います。

森脇 わかりやすいと思いますが、例えばアクティブラーニングひとつとっても、政府の方針でこれがいいよって言われたからやるわけではもちろんなくて、これからは大綱にしたがって、これを達成するためにこれをやるということで。交野市の自主性はきちっとこれで柱を通して、あとは、自分たちの自主性のなかで取り入れていくという考え方が大切だと思います。

中井 その自主性のキーワードってなんですか。

森脇 子どもたちの幸せです。

中井 僕は、会社事業の時もそうだったけど、クオリティとスピードですね。それは、やはりクオリティは相対的に進んでいく。交野やからこれでいいと思っておられる人はいないとおもいますが。企業家はすぐにそうになってしまう。常にクオリティを考えておかないと。財政厳しいからこんなんしかできませんという話をよく出ますけど、それならまずクオリティを第一に考えていく、スピード感あつてということで。教育は百年の体系という考えもあるでしょうが、今学んでいる子どもたちにどう対応するか。そういう意味でクオリティとスピード感で教育を進めていくのが、僕の考え方です。

市長 目標ということについては、共通認識という考え方でご理解いただきたいと思います。森脇委員の方から、具体的に踏み込んだ部分について、それはそれでしっかりと今後具体的にしていかなければならないというご指摘ですね。それは当然方針の中に、具体的な施策にほぼつながるような表現もあります。それはそれでしっかりと、達成できたかどうかをこれからこの会議でも確認していかないといけない。あるいは教育委員会の方でも絶えずチェックをしていただく。もっと言えば、この大綱の位置づけの中に、(仮称)交野市生涯学習ビジョンという策定するといっている。森脇委員の意見もごもっともで、今後教育委員会を中心に、その中味によっては、いろいろと大きく予算に関わる、力を入れていく分野については、教育委員会だけの議論ではなく、わたくしも交えていろいろと協議させていただきたい。そういったご理解でよろしくお願いします。

羽石 2ページですが、大綱の位置づけの中の図で、教育ビジョンから大綱へ矢印が本当は両方を向いているんです。僕はこれでいいと思いますが、その下に、「策定する上での参考とする」と書いていますが、これはずっと残るんですか。これは作る上で、一応いれたという風には僕は理解しています。本来は、ここはまだ仮称ですが、ここに矢印がありますよね。ここにも同じような太い矢印が一本入らないとおかしいなと思ってます。これで最終というところちょっとこらへんがおかしいなと思います。訂正していただいたらどうでしょうか。

市長 それでは、この2ページの「策定する上で参考とする」は、我々の議論の経過として参考することはあったけども、何も後付けで大綱を決めたわけではありません。ビジョンに盛り込まれた考え方を大いに参考としましたが、あくまで議論の過程の話であつて、この部分は本日の資料から削除ということでもよろしいでしょうか。より教育大綱を具体化したものだとするならば、教育ビジョンだけでなく、生涯学習ビジョンとの関連性として、矢印をいれた方がよりわかりやすいというご指摘でございますの

で、そのように図示ではさせていただきます。他に2ページ・3ページについてございませんでしょうか。お気づきの点はどんどんご意見いただいたらいいんですが、次に4ページの「教育百年の森の実現」。皆様方、先ほどの事務局の説明で一通り、あるいは前回も含め概ね理念から基本方針については、皆様方の中にしっかりとと言わんとすることを伝わっていると思うんですが。細かい文章についてでもいいですし、文章を整えるということでは、今日ここですべてをやるということではなく、最終、今後の策定スケジュールの時にも申し上げますが、あまり細かいところを言ってもしょうがないので、内容的にどうか。中井職代の方からは、「壮大な理念を掲げてるな」というところで。ただ期間との兼ね合いからすると、計画期間が5年の大綱であるんだけど、表現として非常な壮大な言葉を選んだわけですが、これは決して計画期間5年で、壮大な百年という文言がまったく食い違うことは無いと私は思っていますが、ここで言わんとしていることは、最後の「生きる力を養い多様性に富んだ人材の育成」、これを自然豊かな交野の森に例えて、多少情緒的な表現を含む理念ということにはなりません。交野らしいという捉え方もできますし。自由にご意見をいただく中で、皆様方でしっかりと理念を共有したいと思いません。

森脇 これを読んでまして、理念なんですが、憲法でいうと前文みたいな感じだなと思って読んでいました。すごく大切なことですよ、考え方として。そこの「木の恵み」って言うのは、環境であるとか市の施策だと思いますが、「お互いを尊重し、支え合い、成長する」という一文がすごく大切だと思います。だから能力をつけて成果を上げていく人間だけでなく、これを前に置いたということは、私はすごく共感するところです。これが交野の柱になるのであれば、そういう人間だと自然に自ら学ぼうとする力もつくんだろうなと思います。何を優先するかといえばこういうことだと。これは大きなことだと私は思います。そう思って読ませていただいています。

羽石 下から4行目、「彼らは共存し」とありますが、彼らという使い方が気になる。他の言い方はないかな。人間から見て生き物は仲間ですよ。もっと引き込んだ良い言葉考えてほしいですね。広く捉える意味で、「私たちは」というのも良いと思いますが。

神谷 私たち生きとし生けるものというのが一般的な言い方ですが。

市長 「彼らは共存し」を「森に関わる生き物は」という言い換えでどうでしょうか。教育長のおっしゃっている部分もカバーできるのではと思いますが。共存とお互いを尊重しというのはかぶるので「彼らは共存し」を「森に関わる生き物は」に変えましょう。

市長 よくやるテクニックとしてこれ全てが理念なんです。森脇委員がおっしゃったように憲法でいう前文ですので、これ全体を理念というので良いと思います。教育百年の森の実現というのが分かりにくいということなので、生きる力を養い多様性に富んだ人材の育成をサブタイトルにしてはどうでしょうか。いきなり教育百年の森の実現といくよりも感覚的にいいのではないのでしょうか。職代のご指摘にも整合性がとれるのではないのでしょうか。

中井 昔の里山のように教育百年の森にも我々が積極的に手を入れていかないといけない。

神谷 私は逆でむしろ大きく出た方が良いと思う。市民目線でしたら関心興味を与えると思う。

羽石 サブタイトルは要れた方が良い

黒田 それではサブタイトル「生きる力を養い多様性に富んだ人材の育成」をいれましょう。続きまして教育の基本方針5ページ～7ページにまいります。森脇委員から見やすく分かりやすくなった、読んでいてイメージが湧きやすい文章になったというご意見をいただきましたが、より交野の思いを込めた基本方針にしたいと思っておりますので、ご意見よろしく申し上げます。

中井 一つ一つが方針であり目標であるので、言葉に誤解を与えないようにしないといけない。文章がシンプルなのでなおさらである。学校教育については「生きる力」が大切で、我々が作った言葉で良いのか、それとも定義付けした言葉にするのかもっと議論しないといけない。確かな学力というのも気になる。新しい学びという考え方は何なのか、いつから出てきたのかが気になる。

北田 10年ほど前からICT環境が発達して、アメリカの方でもICTなどを活用しながら今の世界に適應できるような力も必要ではないかということで、21世紀型スキルというのが言い出しました。ただ知識を知っている理解しているだけでなく、それをどう活用するか、自ら課題を見つけ、課題解決のために他者等と協力してどう乗り越えるか、そこにICTをどう活用するかということです。

中井 グローバルコミュニケーションの話になるけど。関西のある大学でスーパーグローバルユニバーシティとグローバル化した人材を育てようという文科省の取組が行われているが、コミュニケーション能力を高めるとは一緒ではないと理解している。新しい学びの中でICTというテクニカルな話だけでなく、思考力判断力表現力に日本の教育は課題があると指摘されている。これは経済界から文科省に対して大学へコミュニケーション教育がちゃんと出来ているのかという指摘だった。平成24年に中央審議会は大学教育に対してもっとコミュニケーション教育をなささいと、その中でアクティブラーニングという言葉が使われたんですね。大学入試がそれによって変わりますよという話をしましたが、これによって小学校中学校も変わらざるを得ないということで、思考力表現力判断力が付くような学びをしてくださいと、そのうちの一つがコミュニケーション能力です。それが文科省が言う新しい学びですよ、ICTというテクニカルな問題ではなく従来の先生が教えるという学びから、子どもが主体的協働的に学ぶという新しい学びに移ってくださいということで新しい学びという言葉を使っているのではないんですか。

北田 もともと生きる力という言葉が出てきたときにゆとり教育があったと思います。ゆとり教育も新しい学びなんです。先生が一方向的に知識を詰め込むのではなく、自分で課題を見つけて自分で学ぶということで、授業日数をただ減らすということではなかったのだと思います。ただ授業日数を減らすことがゆとり教育ということになってしまった。ということで職代が言う「生きる力」というの

は前からありました。ICTという世界の環境が変わる中で、自分で課題を見つけ解決のためにいろんな能力を使えることも大切で、それが21世紀スキルであり、それで新しい学びという発想ができたということです。グローバルコミュニケーションというのも新しい学びなんです。

中井 アクティブラーニングを進めるうえで先生も変わらないといけない。なぜ大学教育から変えたかという、大学が変わると高校・中学・小学校も変わらざるを得ない。小学校の教育があまりにも時代ニーズからかけ離れている、先生の教え方も180度変わらないといけないと言っている人もいる。これはどうですか。

北田 新しい学びを進めるうえで、これからの時代に合わせて教員も授業方法の改善や指導方法の研究を進めるということが大切だと考えます。

羽石 今出ている問題は学校や大学だけでなく、もともとは社会人・企業人の問題だったんです。世界に出るうえで語学も含め折衝力が弱かったのが、経済の発展が遅れたというのが、もともとはあるんです。これを社会に対して企業力でやろうというのは非常に難しい。それは学校教育の中でやっていこうというのがそもそもの発端なんです。じゃあまず社会に直結している大学だから、まず大学からやろう、そこから高校中小となってきた。じゃあ今までの社会人企業人がそれに対応できなかったのかというと、教育の歴史の中で、そういう学習教育というのを文科省自身が取り入れてなかった。これから世界に出てグローバル社会の中で競争をやっていくためには、授業方法や教育のやり方を含めて考えていかなければいけないだろうという考えです。学校教育だけでなく日本社会にとって必要な能力です。文科省だけでなく厚生労働省、経済産業省も全部一斉に打ち出したんです。

神谷 中井職代の問題提起と似ているかもしれませんが、結局国語の問題として生きる力を育成することと新しい学びの育成という関連性が接続詞の「また」で良いのかということだと思います。適切な接続詞がないのかということです。

羽石 「さらに」はどうでしょうか。

中井 「また」というよりも「しかし」だと思います。

羽石 「しかし」は否定形で、全てを否定することになると思うんです。

中井 私が使った「しかし」は社会情勢の変化に対するしかしです。別の言葉でもいいんですよ。でも「and」「また」ではないですよ。また、新しい学びは育成するのですか、提供するのですか。

北田 「また」「しかし」から言いますと、前段の生きる力というのは昔の生きる力ではないんですよ。グローバル化する社会の急激な変化に対応する力ということですから、生きる力も時代によって変化するのです。グローバル社会の中での生きる力、その中で英語力やそれを使ったグローバルコミュニケー

ション能力等、新しい時代を生きる力ということで「また」ときたのですが、「また」はいいけど「しかし」というのはおかしいと思います。

中井 バランスという言葉を使っています？どういったところで使っています？

北田 これは今回の定義ということでバランスを使っています

中井 交野のオリジナルの言葉でいいの？

北田 そうです。育成であれば新しい学びの創造に努めますと、ビジョンの方でも新しい学びの創造と書いてありますので、良いと思います。

中井 タイトルが目標ということであれば、こころを育み確かな学力ということよりも、今回作った「知・徳・体」をバランスのとれた生きる力を育成しますという方が相対的な目標としてはふさわしいのではないですか。

北田 生きる力をもった子どもたちこそが、自分を大事にするだけではなく、自分と違う意見や文化をもつ他者を排除することなく、認めることになる。心を育むためには生きる力、他者との連携を行いながら新しい学びを習得するものと理解している。

中井 確かな学びというのは異様に細かくないですか？

森脇 情を育みという言葉がある

中井 その下には「知・徳・体のバランスがとれた力」とあり、体が抜けている。それともう1点、生きる力を育成するために、新しい学びを提供するということではないですか？

北田 子どもたち自らが新しい学び、学ぶをするために、教える側として、指導方法の改善などを挙げている。

中井 新しい学びというところで文科省が掲げているが、基本的には、学校現場を変えようと、変えたいという意思が強くて、その中の1つが新しい学びという言葉で表されているのであれば、表現の方法として受け手と主体が混在していると思われる。新しい学びの言葉の使い方が、2段目と3段目では違う。

森脇 中井さんの話を聞いて、恐らく新しい学びの手段、色々な手段を使うことが新しい学びと聞こえた。ただ、そうした能力を養うことが新しい学びと捉えた場合は、育成に努めるということば使いはおかしくないと思う。

中井 だから私は2段目の表現はいい。3段目の表現の仕方が、どうかと。今回の大綱の中ではこの表現は不要と思う。

神谷 2段目はむしろ新しい学びではなく、生きる力ではないですか？その手段として、新しい学びのアクティブラーニングとかがあるのでは。

中井 文脈としては、素直な表現をしておれば、読んでいる人にとっては分かりやすいと思われる。

森脇 方法はいろいろとあると思う。それは、どういう目的に使うかということで、その方法を使うものであって。大切なのは目的である。そういうことをこの前の視察の中でもそう強く感じられた。なので、方法を前に出すよりも目的を前に出して、主体的に方法を選んでいくという地方自治の教育の仕方というものを確立していかなければ、机上論でふらふらしてしまうような結果につながる。

中井 まさにその通りだが、今こだわっているのは、最後の文章が蛇足ではないですかということ。

山本 もう少し単純にとらえてもいいのでは。新しい学びということに一つの定義があるようなイメージを持っておられるが、手法なんですね。そう考えると、この文書で意味は通じる。交野にある新しい学びの手法を使ったらいいわけでしょ。

中井 いや、私は新しい学びというのは目標ではないですか？教え方の手法として新しい学びという言葉を使っているわけで。

北田 標記につきましては、この会議の中で、種々ご議論いただいた内容を入れさせていただいているわけで、確かに指摘のある通り細かな話になるかもしれませんが、そういった経緯も踏まえてのこと。なければなくてもかまわない。

羽石 新しい学びだけでなく、生きる力も入れて、両方を育むことと表現してみるといいのでは？

中井 私がいう新しい学びの意味はそうではない。

羽石 ただ、生きる力と新しい学びを分けると、新しい学びの方が非常に大きくなり、生きる力が小さくなる。

中井 いいえ、生きる力が重要で、生きる力を育むための方策として新しい学びを使っている。なので、そこでとどめておけばいいのだが、そのあとに文章が続いていることが、どうなのか。

羽石 確かな学力の実感というところが、授業改善のところにつながるのであってはいいいと思う。

中井 だから、私は目標のところ、確かな学力という限定は誤解を与えるのではないかということです。生きる力を育むことが重要であって、確かな学力との表現は知力に結びつくイメージがある。

羽石 一番最初、心を育みというところが大切だなと。いくら知識があっても、相手を思いやる心がなければだめ。そういう趣旨から心を育むという言葉を入れたはず。

市長 それぞれの委員がより明確に、よりの確かな表現にしていこうと議論を重ねていただいている。職代の話は論点が2つある。1つは、方針としての表題について、学力という表現がいいのか。生きる力というものが知徳体のバランスであり、学力を表す知があることから、なぜ、知だけに限定するのか。

羽石 学校教育ビジョンの中では「確かな学び」と使っているね。

市長 皆さんがおっしゃられていることは相対することではない。それと2つ目として、文脈の中での「また」の使い方。生きる力の中に、新しい学びという概念がある。「また」と並列で繋げてしまうと、生きる力というものと、新しい学びはイメージとして違う、違和感がある。包括する言葉で繋げた方が誤解も与えることなくよい。またの後にある外国語力云々と続けているが、問題解決能力や人間関係形成能力など新しい学びの形成が最も言いたいこと。で、その背景にあるのが、異なる価値観のある人間関係の中で、意見の違いを認めながら、意見を統合する能力、そういう背景の中で、問題解決能力や人間関係形成能力が必要ということなので、極論、外国語力云々が出てきてしまうと、外国語力だけが求められていると印象付けられるので、なくてもよい。第2段落で言いたいことはそういうことではない。むしろ、新しい学びに努めるということなので、その部分はいらない。それで、又ということ繋げることに並列的な意味合いを持ち違和感があるとすれば、さらにとかとりわけ、そういった接続詞を用いることも考えられる。この2つを職代がおっしゃっている。

中井 それと、グローバルコミュニケーション能力も。

北田 養うだけでなくという表現が違和感ある。本来的であれば、外国語力の育成とともにといった表現の仕方がよい。何も英語に特化したものではない。

中井 そこで、文科省もグローバル人材の育成ということもある。東大・京大は総合力で世界と戦っていこうと。それ以外の大学は、特徴を持ってやっていこうと。関学や立命はスーパーグローバルユニバーシティ、それとともにスーパーグローバルハイスクール、グローバル人材を育成推進のための。ところが、コミュニケーション能力ということだけをとった場合、いわゆるアクティブラーニングだけをとった、異文化だけではなくて、コミュニケーションをもって事業を改善しようと、意図はよく分かるが、グローバルコミュニケーション能力という言葉にあまりこだわらない方がいいのではないかと、英語を含めてのグローバル対応と、それと子供たちの新しい学びの中で、コミュニケーション能力を、グローバルコミュニケーション能力と書いてしまうと、外国人や、異文化やというところで、関学の小学校の先生に聞いたが、高校・大学はグローバルハイスクールであるが、小学校・中学校は基礎力を養うのだ

と。グローバルコミュニケーション能力というところにこだわりすぎているように思うがいかがでしょうか。

北田 これは大事なことだと思っています。英語にしても平成31年度には学力学習力調査に英語が入ってまいりますし、今の小学校3年生が大学受験のときには英語の4観点で新しいものを出していきますので、そういう意味でいきますと、交野らしさといいますか交野市民の求めているもの、「グローバルコミュニケーション能力を身に着けます」ということは、交野の市民にとって興味のあることだと思えますし、大事なことではないかと考えています。英語も含めたグローバルコミュニケーション能力は必要だと思えます。

市長 そうすると、文書の置き方の問題なのだと思うが、先ほど私はこの言葉は無くても意味は通じると言いましたが、やはり教育に携わる者として外国語・英語というものに思いがあるというのであれば、置く場所を少し後にずらせば、例えば「また、異なる価値観を持つ人達の中で意見の違いを統合して、みんなの意見の質を高める能力、グローバルコミュニケーション能力の習得に向け、外国語を養うだけでなく問題解決能力、人間関係を形成する能力をつけるなど新しい学びが重要です」というような、そうすれば印象的には、外国語を養うという位置づけが決して突出してではなくて、喋れるだけではなくて、問題解決能力や人間関係形成能力が大事なのだと。削除とかではなく、文書を組み替えること言いたいことは表現できるように思います。中井委員のご意見も決して事務局・現場の感覚を否定している訳ではなく、より誤解の無いような文書に整えていこうというものだと思います。もう一つ、第1段落の「生きる力を育成します」というところであるが、グローバル化であろうとなんでであろうと、これはそもそもの大原則である。それが今の社会情勢によって時流によって、そういった視点でそういった能力が必要であるといわれだしている訳で、第1段落に「グローバル化による社会の急激な社会情勢の変化に対応するため」とあるが、何もグローバル化だけではなくて、後ほど申し上げようと思っていたところですが、ここでは情を「こころ」と読ましているところ、ここはすごく日本的なニュアンスを受けます。これは羽石委員長がおっしゃった話の中で、デリカシーという言葉が使われていました。異文化との柔軟性とかではなくて、人間のきびとかが分かる子供たちでなければならない、言葉が無くても人として、この人悩んでるよねというような情（こころ）をはぐくんでいかなければならないというような、という風に私はとらえました。標題から、いきなりグローバル化というものがくると、もちろん大事な分野であり、かかせない視点であると思うが、もっと前段の部分を羽石委員長はおっしゃっていたのではないかと。間違っているとこではなくて、少し分かりにくい形になっているのではないかと。

中井 私の文脈から言うと、「生きる力を育成します。そのために新しい学びの育成に努めます。また、外国力を含め異なる価値観を持つ異文化の・・・大切ですので、その習得にも努めます」という風になれば、生きる力からその手法である新しい学び、その中でも交野らしさと、外国語も含めて異なる価値観の方々のグローバルコミュニケーションにも努めますと、そうすれば文脈がつながってくるのではないかと。

森脇 グローバルという言葉の意味が、グローバル＝外国語、外国人というような形のみでとらえられ

ないようにすればいいということですよ。異なる価値観というのはそれだけではないですよ。

市長 皆さんが言わんとしているところは同じであろうと思います。言葉の置き方や置く場所、例えばいきなりグローバル化とか、生きる力が大事だということをシンプルにつけて、グローバル化という急速な変化には、というような流れですよ。

神谷 そうですね。概念がうまく整理できれば。

山本 ここのグローバルというのは、何も外国語だけを言っているのではない。そういうイメージをなくしていくという整理がいいのではないのでしょうか。

神谷 基礎的な学力の定着と、プラス知・徳・体のバランスのとれた力を育成するというのが最大の目標であって、2番目にはその中の生きる力をグローバル社会の急激な変化に対応できる様々な能力を身に着けるといふ、それを習得するための新しい学びというものを我々は目標にしますということではないかと思います。

中井 なおかつ英語力も大切だということ。

羽石 生きる力という考えの中には、段階がある。知・徳・体のバランスのとれた力、これは基礎、よりよく生きていくためには、今度は人とのコミュニケーション能力、その上の次元のこと、なぜ生きていくのかというような究極を求めるといふような、そういう段階があるのだと思います。ここで言う生きる力というのは、どの段階のことを言っているのか、ここで最初にいうのは、一市民として元気で生きていく力を持ちましょね、よりよくするには、さらにこういうことがあるのだ、というような意味合いであると私はとらえています。

神谷 接続詞としては、「さらに」というのがいいのでは。

市長 確かに私もそう思いました。

中井 私は、「そのために」ではないかと思いますが。

羽石 「そのために」ではなくて、段階があるから、さらに高い次元にという意味合いで。

神谷 知・徳・体のバランスのとれた力、これがまず前提で、さらにグローバル社会に対応した生きる力をつけていくというイメージ。

中井 グローバル化というものをあまり大きく考えてしまうと、日本の企業で英語の力を必要としているのは数%しかない。もっと求めている力というのは、コミュニケーション能力。なので、あまりにグ

ローバル化というもの大きくとらえていくのは社会の求めとは少しずれていくのではないかと思います。

神谷 グローバル化というのは社会現象の要素の一つ、今主流になってきている社会現象を表す言葉の一つ、その中で教育という中ではコミュニケーション能力とか英語とか、そういう問題であると思います。だから、社会現象の一つとしてグローバル化というものを使うことは決して間違いではないと思います。

羽石 グローバルコミュニケーションの中には、中井委員がおっしゃられたことも含まれている。異文化能力、異文化理解、交渉力、他者理解、理解力、折衝力など、すべてがグローバルということによって、今までは我々仲間の中で、国の中でとか組織の中でとか、コミュニケーション能力でこの壁をとっぱらっていこうという考え、グローバルというのは。子供たちが世界のどこで活躍していくのかわからない中で、だから企業が求める力だけではなくて、将来子供たちがどこの国に行ってもやっていけるようにしていこうじゃないかというのが、ここのグローバルコミュニケーションという考え方の基になっている。そういう意味で、ここを残していくのは必要なのではないかと思います。

山本 ここは、外国語能力をつけていくというのは絶対条件だと、ただ、そこが最終目標ではないですよと、言っている。ここのグローバルというのは、何も外国語のグローバルだけを言っているのではない。社会全体の中で、これからは色々な枠をはずしていかなければならない時代がくるというグローバルを言っています。

中井 誤解の無いような言葉・表現にしなければならない。グローバルコミュニケーションは大学教育を中心に、言葉にはそれぞれ意味があるわけであって、したがって交野の教育をグローバルコミュニケーションだけ行っているのかというのが私の意見であって、何が大事かという生きる力があって、コミュニケーションも含めて、それはグローバル化以前の問題で、その中でグローバルコミュニケーションも大事ですよと、だから文章を変えたらどうかということ、決してグローバルコミュニケーションを否定している訳ではないけれども、これが前面に出てくると、交野はグローバルコミュニケーションでやっていくのかというとらまえ方をされるのではないか。

神谷 グローバルコミュニケーションというのは何かきっちりとした意味・定義がある言葉なのですか。ここに書いてあるグローバルコミュニケーションというのは、中井委員がおっしゃっているような狭い意味ではなくて、広い意味でのコミュニケーションだと思うのですが、一般的にグローバルコミュニケーションがイコール外国語としてとらえられてしまうのであれば書き方も変えた方がいいと思いますし。

中井 グローバルコミュニケーションという言葉だけではインターネットでもヒットしない。

神谷 一般的にグローバルコミュニケーションという言葉が外国語ということで理解されているのであれば誤解が生じるので表現の仕方を変えないといけないと思うが、ここでいっているのは広い意味でのコミュニケーション能力をつけようといっているのがこの文章の趣旨であると理解できる。

中井 そういう趣旨であるのであれば、新しい学習の中でコミュニケーション能力を身につけておいて、また、狭い意味でのグローバルコミュニケーションというのを後につけてはどうですかということをお願いしている。

羽石 それは2重になってくるので必要ないのではないですか。

中井 であれば、グローバルコミュニケーションという言葉は使わなくてもいいのではないのでしょうか。基本的にはコミュニティ能力というのは、異なる価値観、異なる意見を持った人と理解しあうためにコミュニケーション教育を、だから、なぜ、グローバルコミュニケーションという言葉にこだわっているのか理解できない。

北田 グローバルコミュニケーションスキルという言葉はあります。神谷委員がおっしゃったとおり、グローバルコミュニケーションスキルをつけるということでもいいですが、英語だけという誤解が生じないようこの表現にしました。今後必要なすべての能力としてグローバルコミュニケーションスキルということになっています。

中井 生きる力を育むための次のコンセプトは新しい学びだから、次に新しい学びを持ってきてはどうか、その中の一つとしてグローバルコミュニケーションの育成という形であった方がいいのではないかとお願いしている。

山本 そのような表現になっているように思うのですが。

中井 そう読めるけれども、やはり大事なことから順に書いていくのが文章の作り方ではないか。いきなりグローバル化という言葉が一番出てくる。インパクトはあるかもしれないが、交野の教育大綱としてこれでいいのかとお願いしている。

羽石 交野らしさということていくといいのではないかと思います。これからの新しい世界観、の中で教育を考えていくという中ではこれを前面に出すということは。

神谷 「さらに新しい学びとして」とつなげたら意味は通じるのではないのでしょうか。

市長 これ間違いということではないが、より理解される形にするということで、事務局と調整をさせていただきます。1点だけ確認させていただきたいが、標題のところである。「確かな学力の実感」、学力に限定してしまうとものすごくピンポイントになってきてしまいます。

山本 「学び」のほうがいいのではないのでしょうか。

市長 教育ビジョンにも「学び」と表現されています。ここは「確かな学び」とするほうが、より皆様の思いも反映されるのではないかと思いますがいかがでしょうか。

(各委員) 異議なし。

市長 ほかの部分につきましてもご意見を頂ければと思いますがいかがでしょうか。

神谷 誰もが集い、のところの「家庭や地域の教育力の低下している状況にあります」というところですが、ここまで言い切ってしまうのはどうか、交野にはもっと力が残っていると思いますし、もっと前向きになれるような表現があればいいのだと思うのですが。

山本 「いわれるなかで」とかはどうでしょうか。

中井 あいまいな表現はあまりつかわないのでは。

山本 「問われている」という表現がよろしいのではないのでしょうか。

市長 では、ここの表現は、低下している状況というのは、言い過ぎと言われても仕方ないので、教育力が問われているといった表現で、言葉をお願いします。

中井 自然と歴史を通じたまちという表現で、いいんだけど自然環境で自然、自然とっているが、生活文化として市長として、生物多様性をつくれというのは、自然と共生すること。自然は生活文化としての自然。交野で生活文化に根差した文化はないのかとなる。キーワードは自然との共生。

山本 これは教育大綱であり、まちづくりの中で、議論するのならそうした部分も議論されるであろう。

中井 教育でも環境教育がある。自然との共生というのも重要な概念である。地域が自然とどのような関わりをもっているのか言うのが重要。今の環境教育は何をしているのか。

北田 地域のことを知ることとして、ぶどう畑にも行く。

中井 自然というのもそういった概念があるので、将来的な課題かなあと思っている。

羽石 環境教育としてそうした観点が重要というのは分かる。もう少し、数年たったあと見直しのタイミングでないか。環境教育を盛り込むにはすごく範囲が広い。

森脇 大阪市内では、自然に触れるには電車で1時間かかる。交野では、歩いて山に行くことができる。そうしたことを感じてもらえるような取組が重要。

中井 環境の教育としては、企業とともに生態系の調査をすることも含まれる。積極的な田植えなどもあるが、自然との関わりという教育が重要。教育委員会だけではダメ。

羽石 今、環境で問題なのは排ガスの問題。これは非常に幅広くなって難しい。

中井 生物多様性の戦略というのは、人間も大事やけれど生き物も大事という考え方。

森脇 質の高い教育環境の整備で学校規模の適正化の部分で、定めますと言い切っている。下の部分も新たなコミュニティーの形成としているので、新たなというの具体的な部分を書く必要があるのでは。

羽石 大綱なので、いつまでにどうするとは書かないもの。

市長 学校規模の適正化については、この場だけでなく、委員会で議論をしていただくことになると考えている。今、全庁挙げて準備に入っている。一定の時期がくれば皆さんにご議論いただくことになると考えている。この課題は、避けて通ることはできない。委員の皆さまにもご議論いただく話。新たなコミュニティーをどう指すの?というご質問かと思いますが…

山本 例えば、放課後児童会でも放課後子どもプランの中に、地域の力を入れていただく、文科省と厚労省でもやろうとしている。そうした取組が例としてあげられる。

市長 まったくこれまでしていなかったことという意味ではなく、バージョンアップというご理解をお願いしたいと思う。

中井 コンセプトを含めて、新たにという方が良いのでは。新たな公共という考え方からすれば、新たなという発想が必要と考える。持続可能なシステムを考えるうえで、新たなという考え方がある。

森脇 「新たな」のイメージは何か。言葉の意味は共通認識としてもっておく必要がある。

神谷 コミュニティーといえば、地域的なものをイメージしてしまいがちなので、改めて区割り等があるのかという思いになってしまう。コミュニティーの使い方を地域での関係性とするなら、よいのでは。

山本 文科省は、教育コミュニティーというような使い方をしている。

中井 学校事業の関連としてイメージしてしまう。お金と切り離れたコミュニティーのイメージもある。

山本 これからは、地域の人たちが自主的な活動の中で、学校を基盤に活動するというのが新たなコミュニティーという部分。

森脇 これを機に同じイメージを持つことが必要。

市長 「新たな」という部分は、疑問が解消されたという理解でよろしいか。

市長 思いを込めれば込めるほど、言葉の意味もどんどん出てきて、きりもないのであるが、一堂に会して議論するというのは、一旦、とどめさせていただいて、案としてまとめさせていただきたい。今日いただいたご意見をこの中にのせて、会議での案としてよろしいでしょうか。

(各委員) 異議なし

市長 スケジュール等の説明を事務局にさせます。

事務局 本日いただいたご意見を踏まえ、5 ページの部分については、再度ブラッシュアップを図り、10月15日に予定されている教育会議でご報告させていただき、その後、パブコメを経て再案とさせていただきます。

市長 本日をもって、教育大綱に関する協議を終了とさせていただきたい。内容を大きく変えないものについては、事務局で対応させていただく。最終的には、事務局説明にもあったが、パブリックコメントを経て、策定とさせていただきます。策定となれば、交野市教育大綱を改めてお送りいたしますので、よろしくをお願いします。それでは、教育大綱に関する議論をこれくらいにとどめさせていただきます。その他、何かございましたらどうぞ。

中井 我々教育委員は、レイマンコントロールということで教育者ではないけれども素人でもない。そういうところで、教員、行政の方々を指導する立場。今度制度が変われば、教育委員と教育長との立場が変わってくる。今は、皆さんは執行部。我々は社外取締役。確かな学力のところで、グローバルコミュニケーションにこだわったのはそういうこと。言葉にこだわるのは、これからの行政施策に需要ということであると思い、こだわったところ。これは、執行部と違う立場でものを言うということをご理解いただきたい。

市長 議論が活発になればなるほど、その想いであったり、言葉にこだわることになる。原則は、わかりやすくするということ。教育大綱であれば、若いお母さんたちが見ていただいて、ずっとわかっていたことが望ましい。意見を交わしていくことで、交野の子ども達、或いはすべての年代の方々が学びを続けていくというまちにしていきたいので、よろしく願いたい。

これで、第4回の教育総合会議を閉会とさせていただきます。

※本議事録は、テープ起こしではないため、一部不正確なところもあるかもしれませんが、ご了承ください。